

日本ナイル・エチオピア学会 第19回学術大会

公開シンポジウム

ナイル・エチオピアと多摩から

〈地域と教育〉をみつめる

菊地滋夫

■パネリスト■

松田 凡 (京都文教大学)
澤 利夫 (立川市教育委員会教育長)
早川千晶 (フリーライター)

■親指ピアノ演奏■

近藤ヒロミ (アフリカ民族楽器奏者)

■コーディネーター■

菊地滋夫 (明星大学)

日時

2010年4月17日(土) 15:00~18:00

会場

明星大学日野校

言うまでもなく、日本ナイル・エチオピア学会は、一定の「地域」に対してさまざまな立場や視点から多角的にアプローチすることを旨とする、いわゆる「地域学会」である。それゆえ当学会では、学会創設以来、学術大会の公開シンポジウムにも開催地の「地域性」を取り入れて大切にしてきた。そのように理解した筆者は、第19回学術大会を開催するにあたって、公開シンポジウムのテーマを「ナイル・エチオピアと多摩から〈地域と教育〉をみつめる」とした。ナイル・エチオピアと多摩という互いに遠く離れた「地域」が〈地域と教育〉というテーマの下に出会うとき、どんな景色が見えてくるのだろうか、という問題設定である。では、

なぜ多摩で、なぜ地域と教育なのか。それは、学術大会の会場が東京・多摩地域にあり、またホスト校が地域に数多くの教員を輩出し、現在も教員志望の学生が数多く学んでいる明星大学だからである。以下、このように限りなく素朴な発想に基づいて開催されたシンポジウムの概要を、かいつまんで報告したい。

■ 趣旨

アフリカ北東部に位置するナイル・エチオピア地域には、貧困や紛争といったイメージがつきまとっている。実際、そうした問題の多くは今なお未解決のまま。列強による侵略や植民地支配の歴史、不安定な内政、外部からの武器の流入、天然資源をめぐる大国の思惑などの要素が複雑に絡みあって、解決を難しくしているのである。

しかし、わたしたちがそこに絶望しか見出さないとすれば、それは大きな誤りであろう。苦しい状況にあっても、地域の人々は互いに助けあい、希望を失うことなく輝きながら生きている。この公開シンポジウムでは、そんな希望の秘密を、地域社会と教育との関係に焦点をあわせて、それに関わる人々による具体的な実践のなかに探っていくことにした。

このシンポジウムが開催される明星大学日野校は、東京という大都市の郊外である多摩地域に位

主催：日本ナイル・エチオピア学会 共催：明星大学

ひとと

を育む
地域社会って？

エチオピア・日本・ケニア それぞれのフィールドから

公開シンポジウム「ナイル・エチオピアと多摩から〈地域と教育〉をみつめる」

【パネリスト】
松田凡（京都文教大学教授） 澤利夫（立川市教育委員会教育長） 早川千晶（フリーライター）

【観指ピアノ演奏】
近藤ヒロミ（アフリカ民族楽器奏者）

【コーディネーター】
菊地滋夫（明星大学教授）

2010. 4.17 (Sat) 15:00～18:00 (14:30開場)

明星大学日野校
26号館103教室

多摩モノレール「中央大学・明星大学」駅下車すぐ
入場無料 事前申し込み不要

お問い合わせは、第19回日本ナイル・エチオピア学会学術大会事務局 janes2010@janestudies.org まで

になれば、というのがこのシンポジウムを企画した者としての願いであった。

■ 同時代世界を生きる地域と学校 — プロジェクト・ウオブルの試みと実践

シンポジウムの第1部では、開会の挨拶と上述のような趣旨説明に続いて、京都文教大学の松田凡氏にお話をいただいた。

松田氏は「同時代性」をキーワードに、学生たちとともにエチオピアの古都ラリベラ郊外に小学校を建てることと、日本とエチオピアの小学生の交流を2本の柱とする「プロジェクト・ウオブル」を推進している。今回の報告では、文化人類学の考え方を教育現場、地域、そしてグローバルな世界で活かし、その成果を研究に還元する試みとして、2003年以来取り組んできた活動について、多角的な視点から話題提供をしていただいた。

プロジェクト・ウオブルの授業としての目的は、学生たちが、世界の現状を知り、その状況に関わることであり、「教育」をテーマにすることによる自己の振

り返りを促すことであった。また、文化人類学の理念である「同時代性」の認識を身につけるとともに、開発と援助、ODAの仕組み、NGO/NPOの働き、貧困、英語など、多岐にわたる学びが意図されていた。

活動内容としては、地元の小学校での調査を通して日本の小学生・小学校の文化を知り、ラリベラの小学校で発表すること、日本のODA資金の仕組みを調べ、現地調査を踏まえて申請を行うこと、エチオピアの文化・社会について、日本の小・中・高等学校や地域(商店街、生涯学習センター、資料館など)で紹介するイベントやカフェなどを開催することなどであった。ラリベラで建設を

置する。郊外や、そこに建設されたニュータウンは、人と人の繋がりが希薄な場所であると言われてきたが、そこでもまた教育における地域との連携は求められている。ここでは、そうした地域の人たちと手を携えた学校の熱い取り組みを紹介したい。

〈地域と教育〉という観点でナイル・エチオピアと多摩が会うとき、何が見えてくるのだろうか。それは、人が生まれ、育てられ、そして成長した人々が今度は力をあわせて新しい世代を育て、そのなかで自らもまた成長していくという、人間社会の最も基本的なあり方なのかもしれない。そんなことを参加者一人ひとりが改めてみつめる機会

進めていた小学校は2009年夏に完成した。その後はより多彩な交流を計画し、学生たちは「私たちにこそできる支援のかたち」を模索していくことになっているという。

松田氏によれば、こうした活動を通して見えてきたのは、一つには、文化人類学における「ホームとフィールド」の関係であり、ホームにおいてもフィールドにおいても等しく活動することで、自己と他者を超えていく試みとなりうるという点であったという。また、まちづくりや地域づくりといった観点からは、異世代交流が促されたことにより、地域の学校や商店街、行政との結びつきはまちがいに増えたと実感できるとともに、現場主義教育の重要性を改めて認識したという。

まとめとして、松田氏は、パネル・ディスカッションの内容を先取りする形で、そこに住み続けたいと願う真剣な生きざまこそが地域の「ひとを育む力」となっているということ、グローバル化時代における他地域との交流は、多文化共生の意識の拡がりをもたらし、国家の介在しないface-to-faceのつながりをも実感させていることを指摘して、印象的な報告を結んだ。

■ 立川における「地域と教育」

続いて報告をお願いした澤利夫氏は、東京都立川市の教育委員会教育長であり、今回の学術大会のホスト校、明星大学の卒業生でもある。

澤氏は、律令制の時代から明治時代を経て今日に至るまでの多摩地域の歴史を振り返った後、立川における地域と学校との関わりの具体例を紹介していった。立川における「地域と学校」の連携としては、まずつぎの3つの取り組みが共通してみられるという。すなわち、学校を拠点とした地域防災訓練であり、放課後子ども教室(小学校の教室等を活用した、子どもたちとの学習やスポーツ・文化活動、地域住民との交流活動等の実施)であり、そして、学校見守り活動(シルバー人材センター会員のボランティア活動)である。

さらに、学校ごとの特色ある取り組みとして、和太鼓クラブの演奏活動、夏休み期間を利用したサマースクール、28年間の歴史を持ち地域の伝統行事となった中学生ナイトハイク、高齢者のためのごみ出しボランティアの活動などがいきいき

と紹介された。

澤氏は、「地域と教育」に関する国や東京都の施策をめぐる近年の動向、明治から昭和に至る立川の学校の歴史に言及した後、師と仰ぐ小島宏氏の言葉「地域はあらゆるもの、社会の縮図であり教材である。人は人から学ぶだけでなく地域から学ぶものである」「地域は教材であり、先生であり、地域は家族であり、世界の入り口である」を引用して報告を結んだ。

豊富な事例紹介を柱とした澤氏の報告は、「学校は本来どういう意味をもって、人間の文化伝達の歴史に登場し、……人の発達にふさわしい教育とは何か」「我々は今、人を人にするという本質的な教育の営みを見失っているのではないか」という教育学者の問いかけに、地域の教育行政を預かる立場から、何らかの答えを見出そうとする真摯な試みであった。

■ スラムの駆け込み寺、マゴソスクール —ケニアのハランベ(助け合い)精神による サバイバル

澤氏の報告の後、休憩をはさんでシンポジウムは第2部に入った。その冒頭では、ムビラやカリンバといった、いわゆる「親指ピアノ」などのアフリカ音楽を奏でる沖縄在住のミュージシャン、近藤ヒロミ氏が、アフリカの美しい映像を背景に魅力的な演奏を披露した。

この演奏に続く報告者は、ナイロビ在住のフリーライター、早川千晶氏である。

経済的にも治安の面でも非常に厳しい状況におかれている住民たちが力を合わせ運営するマゴソスクール(Mashimoni Good Samaritan School for the Orphans)は、ケニア最大規模と言われるスラム、キベラにある。早川氏は、地元の人たちと協力して、このインフォーマル・スクールを切り盛りしている。筆者も二度訪れたことのあるこの学校は、ストリートチルドレンや、無理やり働かされ虐待を受けた子ども、あるいは家庭崩壊などといったさまざまな事情を持つ子どもや大人たちのための、一種の駆け込み寺として機能している。

報告では、キベラ・スラムで文字どおり肩を寄せ合って暮らす人たちが互いに知恵を持ちよって助け合い、与え合うことで生き抜くことを可能にし、バラバラの個人だけではどうしようもない困

難を乗り越えていく様子が、豊富な写真を交えて紹介された。路上で消えてゆこうとしている命の炎がある一方で、その輝きを絶やすまいと必死に手を差し伸べる地域の人たちがいる。一見したところでは極限の貧困と絶望が凝縮したかのようにしか思われぬキベラ・スラムの暮らしのなかに、人間がより良く生きるための新しいコミュニティ作りの方向性が示されたのである。

なお、この早川氏の報告と関連して、シンポジウムの会場では、スラム住民たちの手作り工芸品や、マゴソスクールに学ぶ子どもたちの元気いっぱい歌声をおさめたCDなどの販売もあわせて行われた。

■ むすび

第3部のパネル・ディスカッションでは、シンポジウム当日に初めて顔を合わせた3人のパネリストが、互いの報告をどのように聴いたのかについての感想を述べるところから始まり、地域の「ひとを育む力」、グローバル化の時代において加

速化する他地域との交流に期待することについて語り合った。そして、会場からの質問やコメントに答えた後、報告された活動の経験を未来にどのように活かしていくかについてもお話しいただき、公開シンポジウムは終了した。予定の終了時刻を30分ほど超えてしまったが、それは来場した参加者のみなさんとのやり取りが大いに盛りあがったためでもあり、企画者としては喜ばしい限りであった。

このシンポジウムの成果を一言で語り尽くすことは不可能であるし、参加者一人ひとりによって、その意味は異なることであろう。しかし、参加してくださった方々には、地域性への着目がわれわれに多くの発見をもたらしてくれること、それぞれの地域において人間は助け合って生きていく存在であること、そして地域と地域が結びつく時代である今日、新たな助け合いの胎動が感じ取れることなど、多くの重要な事柄が改めて感じられたのではないだろうか。筆者としては、それらの意味を噛み締めつつ、研究と教育の仕事を少しでも前進させたいと思っている。

(きくち・しげお/明星大学)